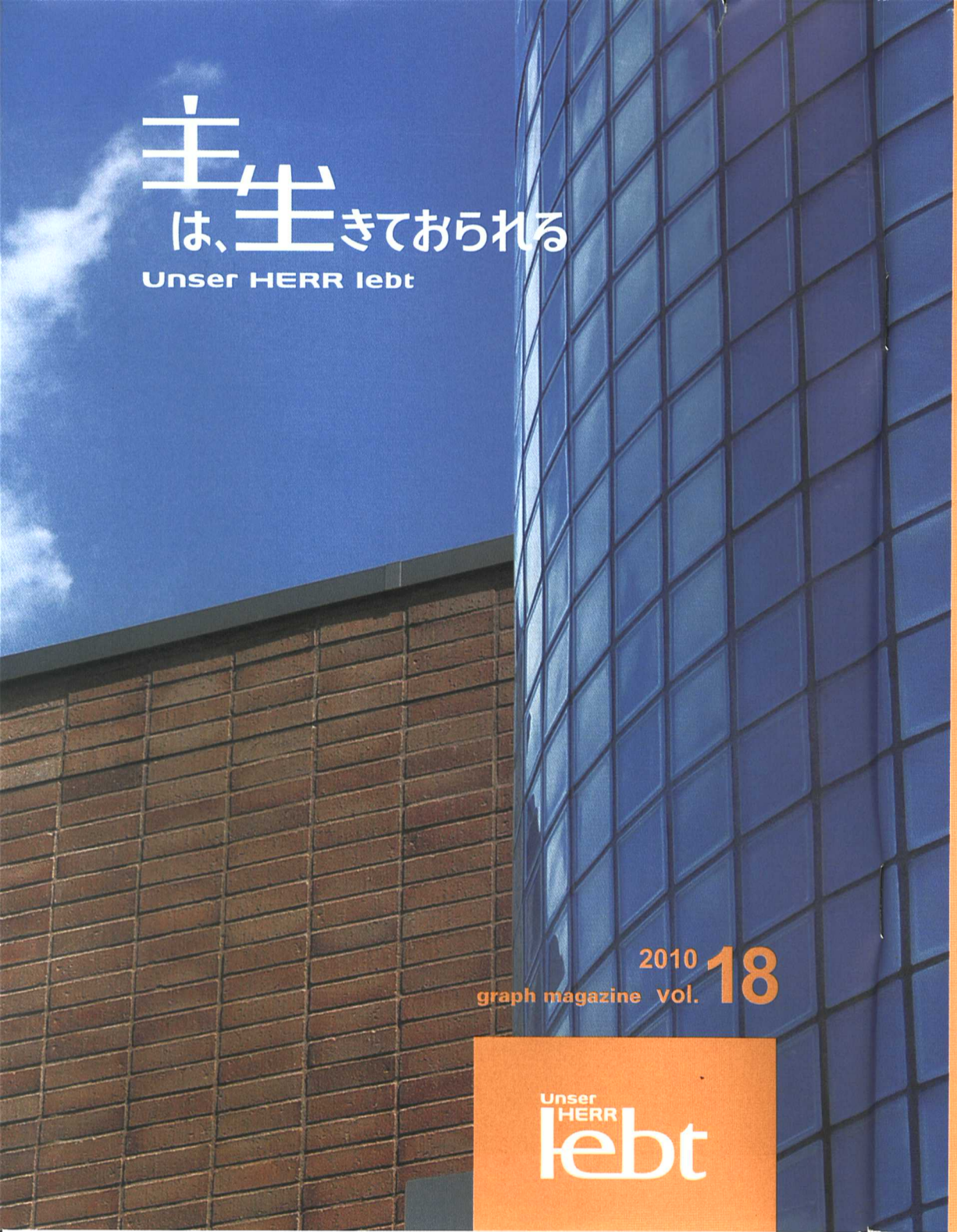
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2010 graph magazine vol. 18

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 18 定価100円（本体95円）

メッセージ

4 献堂式のお祝いをする意味はどこにあるのですか？ ゴットホルド・ベック

12 聖書は何と言っていますか ゴットホルド・ベック

30 主の権威に従う 酒井千尋

36 献堂式のレポート 清水洋一

7人の証

38 あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している 岩下裕子

42 天国での再会を楽しみに 佐藤汀

46 私は、いつまでも主の家に住まいましょう 仲里喬子

50 医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です 田中順治

54 辻純姉妹からベックさんへの手紙 辻純

58 私はいったい何者なのでしょう 白石光一

62 神は、すべての苦難から私を救い出してくださった 佐藤野ゆり

地方集会・家庭集会の集い

76 上海喜びの集い（ミニキャンプ）のご報告 山田渉

78 町田鶴川家庭集会が導かれて 兵藤勝義

82 私と私の家とは主に仕える 横須賀家庭集会 小泉哲男

84 沖縄集会のいま

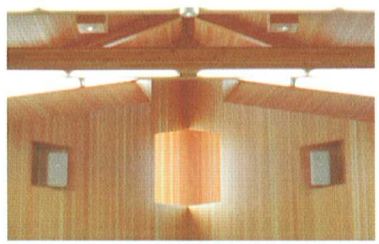
90 キリスト集会へのご案内

96 集会の出版物



献堂式のお祝いをする意味はどこにあるのですか？

ゴットホルド・ベック





第一の理由は、今日まで守り導いてくださった主なる神に、感謝をすることです。また、この建物を建てるために働いてくださった京王建設の方々、また設計と施工管理の責任を取ってくださった環境建築設計の方々に対して、心からお礼を申しあげたいと思います。

1 主なる神は、何のためにこの建物をお与えになったのでしょうか？

まず第一に、主なる神がご自身を啓示してくださるために、この場が用いられなければなりません。私たちの神は、死んだお方ではなく、生きておられ、ご自身を啓示してくださるお方です。私たちの神は、何も見えないような神ではなく、私たちの必要を知っておられ、次のように呼びかけておられます。

わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。（マラキ3・10）

詩篇の作者は約三千年前に、真の神に出会ってから、次のように告白せざるをえなくなりました。

まことに主は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。まことに、国々の民の神々はみな、むなしい。しかし主は天をお造りになった。国々の中で言え。「主は王である。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはない。主は公正をもって国々の民をさばく。」（詩篇96・4、5、10）

主なる神は、ご自身を明らかにすることを望んでおられます。けれどもそのためには、私たちの主なる神に対する信頼と、聖書に対する従順が必要です。主なる神は聖書を通して、つまりみことばを通して、ご自身を明らかにしてくださいます。それゆえ、この新しい建物の中心も、みことばでなければなりません。主なる神の啓示がなければ、また、主のみことばがなければ、私たちは何一つできない憐れむべき存在にすぎません。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたまし







いは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。主の救いを黙って待つのは良い。

（哀歌3・22〜26）

私たちの人生において一番大切なことは、「主なる神の救い」を体験的に知ることです。「主イエス様ご自身」を知ることです。しかしこのような正しい認識と知識は、ただ主なる神の啓示によってのみ明らかにされます。主イエス様を体験的に知るには、主なる神の啓示が前提となります。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。…御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき…（ガラテヤ1・12、16）

ただ、上からの光によって、啓示によってのみ、自分の本当の状態、罪の状態を知ることができ、それを通して、罪を赦されるイエス様を体験的に知ることができるようになります。イエス・キリストを知ることとは、いわゆる「キリスト教」に入ることではないし、洗礼を受けることでもありません。イエス・キリストを知ることとは、罪の赦しを得ることであり、心の平安、また永遠のいのちを自分のものにすることです。聖書が中心にあり、主のみことばの力が体験される所では、おのずから礼拝が起こります。ですから、この建物はなによりも主を礼拝する場でなければなりません。

2 生けるまことの神を礼拝する場とならなければなりません。

まことの神は、まことの礼拝を求めておられます。詩篇の作者は衷心から、主なる神を次の言葉をもって礼拝したのです。

さあ、主に向かって、喜び歌おう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。感謝の歌をもって、御前に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫ぼう。主は大いなる神であり、すべての神々にまさって、大いなる王である。来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。

（詩篇95・1〜3、6、7）







礼拝とは何でしょうか。それは形式的なものでも、内容のない儀式でもありません。まことの礼拝とは、生けるまことの神を体験して、イエス様のすばらしさを味わい知った者のみが、感謝とともに捧げることができる特権です。

まことの礼拝者とは、自分が罪の泥沼から主によって引き上げられ、救われた者であり、自分の恥ずべき過去の罪が、主イエス様の血潮によってすっかり清められているという確信を持っている人々のことを言います。まことの礼拝者は、主なる神がもはや自分に敵対するものではなく、自分の父であり、自分を愛しておられる、ということを知っています。まことの礼拝者は、主イエスに栄光を帰すことのみを大切にします。まことの礼拝者は、主イエス様を喜ばせようという願いに満ちており、主イエス様を心から愛している人々です。

この建物は、主なる神がご自身を啓示される場でなければならず、その結果として、主なる神を礼拝する場でなければなりません。互いにみことばを聞き、互いに礼拝を捧げる者同士には真の交わりがあります。

3 したがってこの建物は、信者同士の交わりの場でなければなりません。

信者同士の、真の交わりの基礎は、「光の内を歩む」ことです。

神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。（1ヨハネ1・7）

真の交わりの秘訣は、主イエス様が私たちを試みてくださるように、という心からの願いを持つことです。三千年前、イスラエルの王であるダビデは次のように祈りました。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

（詩篇139・23、24）

また、旧約聖書の哀歌には次のようにあります。

私たちの道を尋ね調べて、主のみもとに立ち返ろう。私たちの手を







も心をも天におられる神に向けて上げよう。（哀歌3・40、41）

真の交わりの土台は、他の人のために自分を犠牲にするという心構えです。人間はだれでも交わりが必要です。イエス様を信じる者たちもまた、互いに交わりが必要です。喜びをともにし、悲しみをともにすることは、真の交わりのしるしです。

私が心から祈って止まないことは、「この建物は、主なる神が、ご自身を啓示される場であること。この場で神ご自身が礼拝されること。そして信者同士の交わりが持たれること」です。

エルサレムの宮の献堂式で、王であるダビデは告白しました。

「私たちの父イスラエルの神。主よ。あなたはとこしえからとこしえまでほむべきかな。主よ。偉大さと力と栄えと栄光と尊厳とはあなたのものです。天にあるもの地にあるものはみなそうです。主よ。王国もあなたのものです。あなたはすべてのものの上に、かしらとしてあがむべき方です。富と誉れは御前から出ます。あなたはすべてのものの支配者であられ、御手には勢いと力があり、あなたの御手によって、すべてが偉大にされ、力づけられるのです。今、私たちの神、私たちはあなたに感謝し、あなたの栄えに満ちた御名をほめたたえます。」（1歴代誌29・10～13）

ダビデ王の息子であるソロモン王も、同じように祈りました。

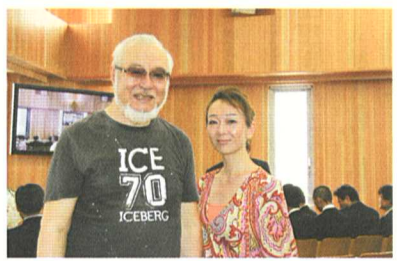
「そして、この宮、すなわち、あなたが『わたしの名をそこに置く。』と仰せられたこの所に、夜も昼も御目を開いていてくださって、あなたのしもべがこの所に向かってささげる祈りを聞いてください。」（1列王記8・29）

アフリカのザンビアで宣教師として働いている友人から数年前、祈りの手紙をもらいました。それを読んだ時驚いて、その事故は本当なのか、夢であれば、と願いました。しかしそれは事実でした。

その年の四月二十七日、ザンビアとセネガルの間で飛行機が落ちて、ザンビアのサッカーチームが全員死亡したのです。翌日、国葬がとり行なわれました。その時、ザンビアの総理大臣Chiluba氏はこう前置きして、主に祈りました。

「話をする前に、祈らせていただきます。なぜなら、私たちはこの国そのものを主なる神に捧げたいからです。愛する国民の皆様、お願いします。ごいっしょに祈っていただきたいのです。

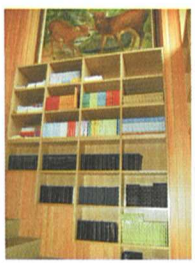
ああ主よ、あなたはあなたを恐れる人々の主です。私たちは今朝、御前にひれ伏しています。この国はあなたのものです。あなたご自身が私たちを導くことができ、あなたのみこころだけが行なわれますように。あなたは与え、あなたは取られるお方です。聖なる御名だけがあがめられますように。私たちはこの世では単なる寄留者にすぎず、旅人にすぎません。私たちは裸で生まれ、また裸で召されていきます。あなたの御







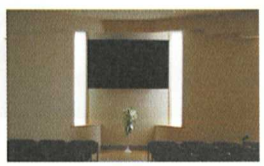



献堂式のお祝いをする意味はどこにあるのですか？

名だけがほめたたえられますように。
私たちの愛する、あの若い人々は、自分たちが召される時がそんなに早くこようなどとは誰ひとり考えもしなかったことでしょう。また彼らは、私たちよりも罪深い者ではありませんでした。主よ。あなた様の貴い御名をほめたたえます。私たちも、いつ、召されるのかは分かりません。
神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ3・16）
このたびの悲報に接し、私たちは今、何をどう考えるべきか、まったく分かりません。どういうことが起こったかもまったく分かりません。しかしあなたは私たちの近くにいてくださることだけは分かります。主よ。私たちは、愛する人々を亡くしたのです。しかしあなたは、必要な助けを必ず与えてくださるお方です。主よ。あなただけが与えてくださる平安を、どうか今、お与えください。あなたの平安は、人の考えのすべてにまさる平安です。私たちは、この国で、まさにこの平安を必要としています。主よ。私たちはあなたを賛美し、ほめたたえます。私たちは自分の持っているすべてをあなたに明け渡します。」
そして総理大臣はしばし涙で絶句しましたが、祈り続けました。
「主よ。私たちはあなたをほめたたえます。御名をほめたたえます。何が起ころうとも、私たちはあなたのものであり、そして私たちはあなたへの信頼を世界に語り続けます。私たちはあなたを、主としてほめたたえます。私たちの経験した、理解を超えた導きは、今、はじまったものではありません。その昔、あなたに愛されたヨブもまた、一日で十人もの子供を亡くし、財産も、富も失いました。今、この真っ暗闇の中でも、私たちの主よ。あなたに信頼いたします。この国の全国民とともに、私は今告白します。主イエス様。あなたこそが、私たちの神であり、主であり、この国を支配したまうお方です。私たちはやがて勝利をいただきます。主によって私たちは勝利者となります。主の御名によってこの祈りを御前にお捧げします。アーメン。」





このように祈ることができる総理大臣を持つ国は、おそらく他にはないでしょう。混乱しながら、涙ながら、それでも国民とともに懸命に捧げられたこのような叫びと祈りこそ、主が求めておられる、まことの礼拝、まことの信仰、まことの賛美の現われではないでしょうか。私たちの信仰、また新しい建物に満ちあふれる主への真情、愛、祈り、賛美も、このようでありたいものです。
最後に、有名なドイツの作曲家ヨハン・セバスチャン・バッハが心の底から叫んだ言葉をご紹介します。
「主よ。あなたは私の生涯の中で、どれほど多くのことをしてくださったことでしょう。たとえ私の舌が千枚あったとしても、そのくすしいみわざのすべてを語り尽くすことはできません。あなたはなんと偉大で、栄光にあふれ、しかも優しく、慈愛にみちておられることでしょう。あなたの愛は、なんと豊かで深い愛でしょう。ですから私は、今日もあなたに、賛美と栄光の歌を歌わずにはいられません」
（このメッセージは、二〇一〇年九月十二日、新しくできたキリスト集会の会堂の献堂式でベックさんが語られたものの要約です。）




聖書は何と言っていますか

ゴットホルド・ベック　第6回

あなたはなぜ信じないのですか？14の質問に答える（下）

前号では、イエス様を信じられない、と言う人たちがよくあげる十四の理由のうち六つについて検討しました。今回は残りの八つについて考えてみましょう。

7「信仰を持つと迫害を受ける？」

肉の思いは主なる神の御霊に逆らい、また御霊の思いは肉に逆らいます。ですから、イエス様を信じる者は、この暗闇の世にあっては迫害を受けるのです。イエス様のための苦しみは信じる者の特権です。なぜなら、その人は主の足跡を踏んで、主に従って歩くことが許されているからです。主に救われて永遠のいのちをいただいた者が、イエス様に用いられる唯一の道は、「迫害を恐れずに主に従う」ことです。主はそのような者を求めておられます。

もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。

（ヨハネ　15・19、20）

自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。

（マタイ　10・38）

パウロははっきりと言っています。

確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。（2テモテ 3・12）

もし、主を信じている者に何の問題もふりかからず、この世からの反発もないようなら、それこそが問題です。その人はこの世と妥協して生きているのではないでしょうか。信仰とは、何を第一とするか、ということです。この世と妥協せずに、主を第一として生きる者には、当然、問題が起こります。かつての初代教会の人々の態度はすばらしいものでした。彼らはいろいろなことで悩みましたが、恐れませんでした。彼らは約束されているものをはっきりと見上げていたのです。ですから、迫害を当然だと考えたのです。このような態度で生きた初代教会の信徒たちは、主によって大いに用いられ、祝福されました。使徒たちの持っていた確信は次のようなものです。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ 8・18）

使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと言い渡したうえで釈放した。そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出ていった。（使徒 5・40、41）

もし耐え忍んでいるなら、彼（イエス様）とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。（2テモテ 2・12）

弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければならない。」と言った。（使徒 14・22）

この世にあっては、信じる者が悩み苦しむのは当然です。問題は、悩み苦しみのときにどのような態度を取るかではないでしょうか。問題そのものではなく、問題に対する主への姿勢こそが勝利に至るか、敗北に至るかを決めます。勝利を得るには次の二つのことを知る必要があります。第一に、苦しみや難しい状況はいつまでも続くものではないこと、第二に、私たちに将来啓示されようとしている栄光に比べれば、それらは取るに足りないものだ、ということです。目に見える現実によって縛られることがあってはなりません。

義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。わたし（イエス様）のために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。（マタイ 5・10～12）

いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。（マルコ 8・35）

このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。（マルコ 8・38）

主の救いを受けた者の取るべき態度とは、どのようなものであるべきでしょうか。一言で言うなら、いつもイエス様を見上げ、イエス様のことを考えることではないでしょうか。どのような時にも、イエ

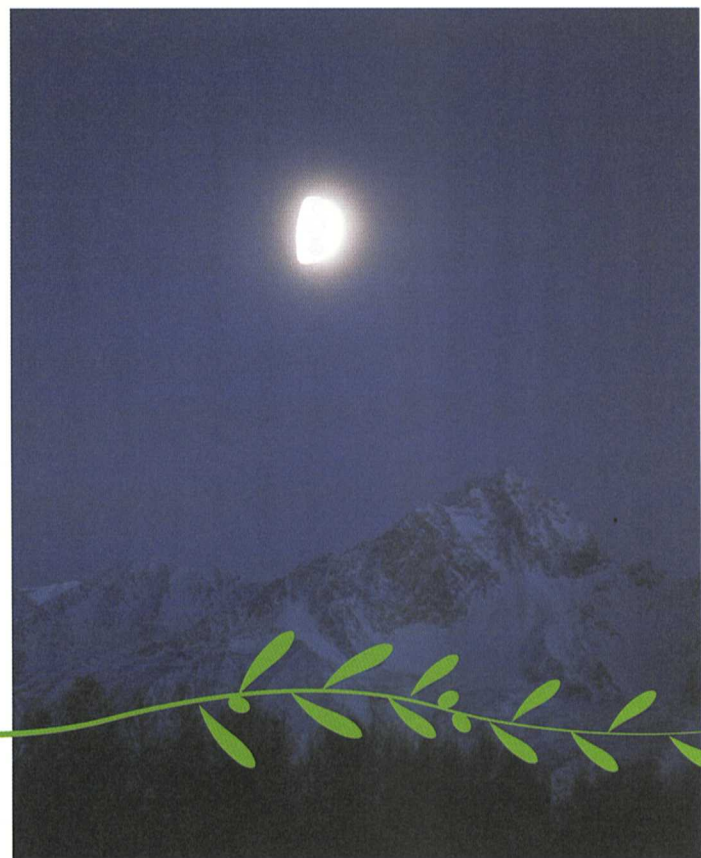
ス様について考えるなら、必ず勇気が出ます。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

（ヘブル　12・2、3）

罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行なっていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。

（1ペテロ　2・20、21）



8「主を信じると立場が悪くなる？」

冬には、ひまわりは花を咲かせることはできません。同じように、主なる神に従うことを欲しないこの世界にあって、信じる者の立場が悪くなる場合があります。しかし、「主に従う者がこの世の力に翻弄され、ひどい扱いを受ける」と考えるのは誤りです。むしろ、信じる者はどのような状況にあっても、主の支配と守りのうちにあり、何にもましてすばらしいことを体験するにちがいありません。主なる神には不可能なことは一つもありません。また主は誠実なお方です。ですから、信じる者の心に入って霊的な成長の妨げとなるものを取り除き、良いものを与えてくださることを知るべきです。主なる神は、私たちの考えも及ばない方法で、その人の立場を良くしてくださいます。

わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。（マタイ　19・29）

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。（マタイ　6・33）

人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましょう。（マルコ　8・36）

9「主は不公平で恐ろしい？」

このような考えは、ものごとを表面的にしか見ないことから出てきます。人は、戦争、ききん、地震、災害などを見過ごされる神は不公平だ、と言います。また、難病を患うこと、能力や容姿に

差があることなども不公平だと言います。またある人は、あってはならないようなことも主は許される、だから恐ろしいと言います。しかし、主なる神を訴えることは危険であり傲慢です。主と争うことはわざわいです。そのような行為は悪魔の仲間がすることであることは明らかです。主なる神は、人をご自身に引き寄せ、救うために鞭を用いられることがあるのです。

しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。（ローマ　9・20）

非難する者が全能者と争おうとするのか。神を責める者は、それを言いたててみよ。（ヨブ　40・2）

そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。（ヘブル　12・5〜7）

主なる神は義なる方ですから、ひとり子の主イエス様を死なせることによって罪の問題を解決されました。イエス様は、私たちの罪のために苦しみにあってくださいました。イザヤ書53章はその事実を啓示によって知らせています。大切なことは、罪の恐ろしさ、そしてイエス様の愛を知ることです。これらの事実に目を留めるなら、主につぶやき、みこころを疑うことがどれほど愚かで高慢なことかは明らかです。

彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。（イザヤ　53・3）

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。（イザヤ　53・5）

10「人を許すことができない？」

人を許すことができないということは、許したくないということを意味しています。自分をはずかしめる者を許さないということは恐ろしいことです。その心は不安に襲われます。

見よ。心のまっすぐでない者は心高ぶる。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。（ハバクク　2・4）

主の赦しの命令に従わない者は、主によって捨てられます。

また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。（ローマ　1・28）

彼らは、…わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。（ローマ　1・29〜31）

しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。（マタイ　6・15）

兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。（1ヨハネ　3・15）

11「救われるにはもう遅すぎる？」

このように考える人がいますが、それにはいろいろな原因があるでしょう。たとえば、心が落ちこんでいる、肉体に病気を患っている、恵みを受け取ろうとして間違ったむなしい努力をしている、救いについて知らない、などです。しかし本当の理由は、救いを受けさせまいとして悪魔が「もう遅すぎる」と囁きかけているからです。この囁きに耳を傾けると、多くの人は「私はもう捨て去られている」と考えます。しかし、主はあなたを捨てたりなさいません。遅すぎることはないのです。

彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。（イザヤ　42・3）

律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。（ローマ　5・20）

今は恵みの時、今は救いの日です。（2コリント　6・2）

今は、悔い改めて救いを受けることが許されている時なのです。だから、「悔い改めるのに遅すぎることはない」のです。

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。（2ペテロ　3・9）

御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。（黙示録　22・17）

「悔い改め」とはどのようなものでしょうか。「努力して今までと違う自分になる」と神様の前に宣言することでしょうか。また、悔い改めた後でもう一度同じ過ちを犯したなら、主から捨てられるのでしょうか。もし悔い改めがそういったものなら、「私にはその自信がないから恐ろしくて悔い改めはできない」と考える人がいるかも知れません。悔い改めとはいつでも、だれでも、へりくだって、主の前に祈れば、必ず受け入れられます。これはすばらしい事実です。ですから、勇気を持って主の前に進み出ようではありませんか。

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。（ヨハネ　6・37）

主はシオンを建て、その栄光のうちに現われ、窮した者の祈りを顧み、彼らの祈りをないがしろにされなかったからです。（詩篇　102・16、17）

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」（イザヤ　1・18）

はどのようなものでしょうか。それを知るには、悔い改めの実例が参考になります。

十字架にかけられていた犯罪人のひとりはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」（ルカ　23・39〜43）

12「信じる人々の中には悪い実例が見られる？」

この言葉を否定することはできません。事実、さまざまなかたちで悪い実例となっている信者が少なくありません。自分は信者であるといいながら、悔い改めの経験もなく、したがってイエス様の救いを経験していない者が、今日では世界中に多くなっています。いわゆる聖職者と呼ばれる人たちの中にさえ、そうした例は見いだされます。

悔い改めの経験を持たない信者は、肉の考えに捕らえられていて、すべてに妥協しています。しかし、実は本人は妥協していることさえ知らないのです。まじめに主を信じ求めようとしている人にとってそういう信者はつまずきとなります。しかし、悪い例となっている信者は、だからといって、主の救いの不確かさを示すものでもなく、また、信者を見て、それが悪い実例になっていると考える者は、いったい自分のことをどう考えているのでしょうか。大切なことは、他の人がどうかではなく、自分がどうかなのです。次のみことばから、人は自分がどのような状態にあるかを知ることができます。

して救いを拒絶することの理由とはなりえません。害虫によって枯れた植物が雨の中にあるからといって、植物の生育に雨が必要でないとは言えないのです。本当の悔い改めをしていないなら、救いを受けた者ではないのです。

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。（2コリント　5・10）

また、信者を見て、それが悪い実例になっていると考える者は、いったい自分のことをどう考えているのでしょうか。大切なことは、他の人がどうかではなく、自分がどうかなのです。次のみことばから、人は自分がどのような状態にあるかを知ることができます。

さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、「あなたの目のちりを取らせてください。」などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。（マタイ　7・1〜5）

主なる神だけが完全に義であり、さばくことのできるお方です。この主なる神の前では人間はだれでもが不完全です。ですから、他人をさばくことはできません。特に、イエス様を信じて救われた者はイエス様の肢体となっているのですから、他の兄弟姉

妹に対する批判は、イエス様に対する批判であることを深く受け止めて、心にとどめるべきです。

ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。私たちは、そのようなことを行なっている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。（ローマ　2・1〜6）

13「聖書には理解しにくいところがある？」

これは事実です。イエス様は「わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。（ヨハネ6・63）」とお語りになったように、聖書は人間の構想に基づいて、あるいは思索によって書かれたものではありません。主なる神からの霊感によって生まれたものです。ですから、もともと聖書は人がすぐ理解できるものではありません。ただ、耳を傾ける者だけが、聖霊の導きのうちに主なる神の声を聞き取ることができるのです。とくに、生まれながらの人、主とつながっていない人には聖書はまったく理解できないでしょう。彼らは霊的に盲目なのです。しかし、心を開いて聖書に向かうなら、だれでも神のことばを聞くことができるのです。

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。（1コリント　2・14）

それでもなお私たちの福音におおいが掛かっているとしたら、それは、滅びる人々のばあいに、おおいが掛かっているのです。そのばあい、この世の神（悪魔）が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。（2コリント　4・3〜4）

多くの者は、身を清め、白くし、こうして練られる。悪者どもは悪を行ない、ひとりも悟る者がいない。しかし、思慮深い人々は悟る。（ダニエル　12・10）

自分の頭で、つまり理性で聖書を理解しようとするのは的外れな行為です。主の考えと人間の考えは全く異なるからです。

そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。」（マタイ　11・25、26）

主に従う信者であっても、その考えや思いは、主なる神の考え、思いとは違っていることが多いのです。次のみことばは信者に対するものです。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。―主の御告げ。―天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。（イザヤ　55・8、9）

聖書は理解するために読むものではありません。イエス様が語ってくださるみことばを、聞くために読むのです。そして、みことばを受けて、祈りへと導かれることも多いのです、またみことばは、それに従って歩むようにと主から与えられているものでもあります。

主よ。お話しください。しもべは聞いております。（1サムエル　3・9）

こういう態度で聖書に向かう人には次の約束が与えられています。

私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。（詩篇　119・18）

あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。（ヤコブ　1・5）

しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました。（1コリント　1・30）

14「聖書には多くの矛盾がある？」

ある人は、このように言います。しかしその言葉は多くの場合、他の人から聞いたことを言っているに過ぎないのです。聖書を神のことばとして認めたくないので、そこには矛盾がある、と言うのです。たしかに、聖書の中には理解できないところもあります。しかし、矛盾はありません。矛盾があるという人たちに対するみことばは、次のようなものです。

律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、また強く主張していることについても理解していません。（1テモテ　1・7）

ところがこの者どもは、捕らえられ殺されるために自然に生まれついた、理性のない動物と同じで、自分が知りもしないことをそしるのです。それで動物が滅ぼされるように、彼らも滅ぼされてしまうのです。（2ペテロ　2・12）

彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、…（ローマ　1・22）

聖書のみことばは神の言葉です。

あなたのみことばは、よく練られていて、あなたのしもべは、それを愛しています。（詩篇　119・140）

主のみことばは混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された銀。（詩篇　12・6）

神のことばは、すべて純粋。神は拠り頼む者の盾。（箴言　30・5）

また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。

（2ペテロ　1・19）

おわりに

ここまで、まだ、イエス様の救いを知らない人々が、「私は信仰を持つことはできない」と考えてしまう理由のいくつかを見てきました。これらの理由には、たとえば、「私が救われるためには自分を変えなければならない？」というように、まったく誤解である場合が少なくありません。しかし、「悪い実例がある？」のように、それ自体は間違っているとは言えないが、信仰の妨げにはなりえないものも含まれています。結局のところ、大事なのは、常に、「聖書は何と言っているか」です。「聖書は何と言っているか」と聖書に尋ねる者は真理を見いだします。しかし、聖書にではなく人の意見や考えに答えを見いだそうとする者、あるいは自分の考えた結論を先に持って聖書を読む者は、真理に到達することはできず、したがって罪に勝利することはありません。

主なる神の言葉である聖書は、人間の理解や研究の対象とはなりえません。人がもし「キリストにあるいのち」をいただきたいと思うなら、人はキリストの前に正直に進み出て、聖書のみことばを聞き、信頼する以外に方法はありません。イエス様が人々にお語りになった最初のみことばは、「悔い改めて福音（聖書）を信じなさい。（マルコ　1・15）」でした。十字架の上のイエス様のお心にあったことも、そして復活の主の私たちへの呼びかけのことばも、ここに凝縮されています。悔い改めのない信仰は根のない花のようなものです。人の目にはどれほどすばらしい信仰のように見えても、またその人がどれほど魅力的に見えても、実を結ぶことはありません。

また、信仰のない悔い改めというものもありえません。それはたんなる後悔に過ぎません。それは美しく飾られたメリーゴーラウンドに乗って上下し回転する人のようなものです。どれほど敬虔に見えても、いつも同じところをぐるぐるまわっているだけで、一歩も進むことはないのです。悔い改めを伴う信仰だけが、イエス様から御霊をいただいて実を結ぶことができるのです。

イエス様は私たちを愛し、その罪の身代わりとなって十字架にかかってくださいました。イエス様だけが道であり、真理でありいのちです。私たちはイエス様のもとに行くときに、キリストにある永遠のいのちを受けることが約束されています。それはこの世の中には見いだし得ないもの、つまりどのような状況にあっても絶えることのない喜びと希望のみなもとです。事実、信じる者は、それまでとは違う新しい自分を見いだします。このようにイエス様から受けるものは、「それまで持っていたものに加えて受ける何かすばらしいもの」ではありません。滅びに向かっている者が、「それによって生きる者とされる」ということなのです。それは「新しい創造」です。主なる神から無償で提供されている大きな恵みを無駄にすることがないように、あなたも信じて救いを受けることが大切です。





主の権威に従う

酒井千尋

ベックさんがドイツから日本に遣わされ、一生をかけて福音を伝えられたその働きは日本全国に実を結び、今また東京吉祥寺に新しいキリスト集会所ができました！　主の限りない恵みと祝福に心から感謝申し上げます。

皆様よくご存知の「主の祈り」に、次のような所があります。

みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。　（マタイ　6・10）

今日はここを出発点に、「主の権威に従う」ということを聖書から見てみましょう。ここでイエス様は、「天の御国で神の意思、神の絶対の権威が行なわれているように、この地上でも神の意思、神の絶対の権威が行なわれるようにと祈りなさい。」と言っておられます。私たちが今生きて生活しているこの地上は、すべて神の意思、神の権威に従い、支配されなければなりません。それを第一に「祈り求めなさい。」ということです。しかしここは、ちょっと注意が必要です。「みこころが天で行なわれるように、地でも行なわれますように。」という祈りが、気が付かないうちに、「この地上では“私が正しいと考える神の意思、神の正義”が行なわれますように。」という考えや望みにすり替っていることがあるのではないでしょうか。「私が正しいと考える神の意思と正義の実現を願う」ということは、神の意思の上に自分の意思を置いていることになります。

イエス様は、「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」と言われました。この祈りには、私たち人間の意思、判断、正義などは一切入っていません。私たちはただ、主のみこころだけがそのまま地で行なわれることを祈ればいいのです。ですから、人間が、神のご意思を勝手におしはかって、何が正しく、何が間違っているかを「自分で」判断しようとする態度は危険です。何が正しいかを決めることができるのは、ただ神である主だけです。人間にはそんな能力などないのです。

たとえば私たちの判断が、神の前に正しいと、どうして分かりますか？　ある事件や人物について、私たちは判断し、評価し、ときに裁いたりします。しかし、その判断の元となる真実を、私たちはどれだけ知っているでしょうか。人間の判断は、最初に聞かされた話による先入観、噂、憶測、ある場合は意図的な中傷、風評などに影響されやすいものです。また、それらの裏には隠された事情もあるでしょう。それらの誤った認識の上に成り立つ私たちの判断は、不正確で表面的で誤りだらけで、思い込みが混ったものになりがちです。そしてそこから、人に対する批判とさばきの心が起こってくることも多いのです。

また、人間が「これこそが正しい」と思い込む、

いわゆる「私中心の正義」は、人によって異なり、常に相対的ですから、神の権威に対する見解の不一致と、神のみからだである教会への批判、分裂をもたらします。皆がそれぞれの正義を主張しあうようになれば、主のみからだはどうなりますか？　分裂の連鎖反応です。そしてこれこそが、サタンの思う壺です。そうではなく、「神の立てられた権威に従う」。これがクリスチャンのとるべき態度ではないでしょうか。約二千年前に、パウロは当時の混乱した教会に対して次のように説いています。

どうか、みなが一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。……兄弟たち。あなたがたの間には争いがあるそうで、あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく。」「私はアポロに。」「私はケパ(ペテロ)に。」「私はキリストにつく。」と言っているということです。キリストが分割されたのですか。あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか。あなたがたがバプテスマを受けたのはパウロの名によるのでしょうか。

（1コリント　1・10〜13）

実に鋭い言葉です。パウロの時代、こういう混乱があったのです。で、パウロは言いました。「キリストが分割されたのですか。」つまり「あなたがたは誰につこうとしているのか。私たちがつくべきなのはただお一人、主イエス様だけのはずではなかったのか」と。

さて、聖書には「神の権威への服従」が、歴史的な事実として記録されています。

1まず、アダムとエバ。神の権威の領域を侵害し、自分たちで善悪を判断しようと思い上がって、エデンの園から追放されました。原罪です。

2モーセは、神の命令によってイスラエルの民を率いてエジプトを出て行きました。イスラエルの民は、多くの艱難辛苦と試練に耐えてモーセにつき従い、神の約束の地を目のあたりにしました。彼らがどんなに苦しくてもモーセに就き従ったのは、モーセが神によって立てられた神の権威の代行者であることをよく知っていたからです。

3ヨブは、神に対して自分がいかに正しく、神がいかに理不尽であるかを主張しました。しかし神はそのヨブに対して、絶対の神の権威を啓示されました。ヨブが灰とちりの中で悔い改め、主の権威に絶対的に服従した時、神は彼を元通りにし祝福されました。

4ダビデは、時の王サウルに迫害され何度も殺されかけました。でも彼はサウルに忠実でした。ダビデはサウルを殺害する機会がありましたが、サウルを護りました。彼は徹頭徹尾サウルに従いました。サウルが正しい王だからではありません。主の権威によって立てられた王だからです。だからダビデ自身が王になった時、主におおいに祝福されたのです。

5イエス様ご自身、父なる神の絶対の権威に服従なさいました。罪なくして十字架につけられる。それはどう考えても、理不尽なことに見えました。イエス様は祈られました。

わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。

（マタイ　26・39）

これらの記録こそ、主の絶対的な権威に従うということ、つまり「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれる」ということのまぎれもないお手本です。

パウロは、別のところで、次のように説いています。

謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一

致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。（エペソ　4・2〜6）

さて、主の祈りのもう少し先を見てみましょう。

私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。（マタイ　6・12）

ここは、主に対する私たちの負いめ、罪、不従順、不信仰、主がお喜びにならないすべての思いと行為についての「ごめんなさい」です。そしてこのようにへりくだって自分を小さくしての祈りこそ、なにより主が喜ばれるものではないでしょうか。私たちは何も立派な者なんかではない、「私たちの負いめをお赦しください」。そして、この後が重要です。「私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。」ここで注意すべきは、「赦そうと思います、赦します。」という未来形ではなく、すでに「赦しました。」と過去形になっていることです。イエス様は、私たちが主に負いめの赦しを乞う以上、「あなたがたも、あなたがたに負いめのある人々を赦してしまいなさい。」と求めておられます。ここには、主にある一致、主にある仲直り、主にある仲の良さへの道が示されています。おしまいにもう一つ、みことばを見ておきましょう。

私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。（マタイ　6・13）

この祈りは、今や私たちの痛切な叫びではないでしょうか。この悪とはまず、この世に満ちている誘惑、悪、敵意、また自分の中にある悪です。しかし最も大きな悪は、サタンの攻撃です。サタンの攻撃は実に巧妙で狡猾です。これに対して、私たちは到底太刀打ちできません。ほんとに凄い、あっというような大掛かりなことを仕掛けてきます。そのとき私たちは、いかに愚かで弱いかを知っていますから、イエス様に逃げ込み、叫びます。「イエス様、試みに会わせないでください！悪から救い出してください！」

イエス様はほんとうに優しいお方です。そのイエス様が、「こう祈りなさい。」と言っておられるとおりに祈って、聞き届けてくださらないことがありましょうか。

そして私たち皆が、小さな自分の正義を捨てたところから、主の働きが始まります。正義は、ただ、主イエス様だけにあります。権威は、ただ、主イエス様だけにあります。ですから、すべてを主のなさるままにおまかせしましょう。ただひたすら、主イエス様だけにつきましょう。私たちの集いは、イエス様ご自身によって建て上げられた、イエス様ご自身のみからだです。私たちは主に従う群れです。たとえ今、私たちの目の前にどのような問題があったとしても、主に祈ることによって、主ご自身が必ず解決してくださいます。これからの日々、主イエス様がどれだけ大きなことをして見せてくださるか、それを楽しみにして、主の御手が大きく動かされることを祈って待ちましょう。

（二〇一〇年六月一六日、福音センターでのメッセージから）



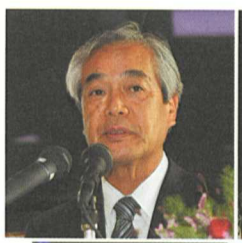
酒井千尋　一九三三年神戸生。芸大中退、早大卒。帝人、イーモリアート、オークなどで企画、編集、ライター。

吉祥寺キリスト集会に待望の新会堂が完成して二〇一〇年九月十二日午後、献堂式が行われました。式にはキリスト集会の兄弟姉妹と建築関係者ら数百人が列席して、会場に充てられた一、二階のホールと旧集会所はほぼ満席。新しい集いの場を与えてくださった主の御働きに感謝するとともに、新会堂にふさわしい歩みが求められていることを強く思わされた会合になりました。式は日々の歌四十七番を全員で賛美して始まり、司会者のお祈りに続いて、ゴットホルド・ベック宣教師が聖書のメッセージを語り、その中で「新会堂は、主なる神がご自身を啓示してくださる場として用いられる必要がある。また、生けるまことの神を礼拝する場に、さらに信者同士の交わりの場にならなければならない」ことが強調されました。このあと、キリスト集会の四人の兄弟から、それぞれ主イエス様と建築関係者への感謝と、主に用いられる会堂になる必要などが述べられ、建築を担当した京王建設社の松木謙吉代表取締役に感謝状が贈られました。そして最後に松木取締役、斎藤直人同社現場所長、佐々木英雄日本陶業専務取締役、宮坂正寛環境建築設計社長から挨拶があり、宮坂社長は「設計に当たって一番初めに与えられたテーマは光（イエス様）でした。このためガラス・ブロックと窓から採光するようにしました。また自分自身へりくだり、静まって祈りたいという思いで、自然の素材を天然のままで使いました」と語りました。

新しい会堂は鉄筋コンクリート造二階建て、延べ床面積三八九平方メートルです。主要な集いの場となる二階の礼拝堂は二百十八の椅子席があり、一階の礼拝堂（約百五十席）と旧集会所を合わせて六百人以上が集えます。それぞれに大型スクリーンが備えられ、礼拝堂の様子が映し出され、音声も伝えられますので、部屋は別々であっても、心を合わせて礼拝・福音集会を共に持つことができます。一、二階とも冷暖房完備で、特に二階は板張りにした内装がやわらかい雰囲気をつくり、居心地をよくしています。一階は湿度を調整する働きのある珪藻土の塗り壁にしたほか、洗礼槽と二つの更衣室、さらに一六・六九平方メートル（五坪）の母子室を付設、母子室にはスクリーンとスピーカーのほか、子ども用トイレ、礼拝堂が見える窓もあります。このほかエレベーター、だれでもトイレ一つと、健常者のトイレも十分な数（女子用だけ七つ）備えられました。

なお、新会堂の建築と並行して旧集会所の改修工事が行なわれ、劣化したコンクリートの補強や天井の防水、さらに新会堂と調和するように玄関がリフォームされました。

集会後に交わりを持てるような広いスペースを、という長年の願いに主が応え、実現に導いてくださったのです。















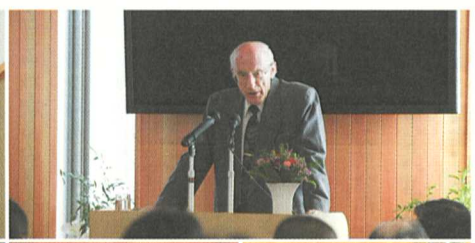
















次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。（1テサロニケ　4・17）



裕子さんと肇さん

あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している

岩下裕子



左から裕子さん、淳一くん、肇さん、巳沙さん、真菜さん

二〇一〇年四月五日、夫、岩下肇は、単身赴任で一足先に天国へ行きました。生涯ではじめてのそして最後の栄えある栄転でした。「天国の中心にイエス様が見える。そこに行けるのが嬉しい。本当に嬉しい。」と、喜びに満たされて私たち家族の元から旅立っていきました。この世での六十四年の生涯を終え、いま、永遠の命を頂いて、イエス様の近くで、言葉では表現できないような幸せを味わっていられるのかと思うと、本当にうらやましい思いがいたします。「いまごろ夫は天国でどんな風にしているのだろう。」などとよく想像をめぐらしています。

主人は信仰を持ってはいましたが、去年の暮れまでは、痛みの苦しさと病気が転移することへの不安から、だんだん暗い闇にすっぽり包まれたような精神状態になり、いつもそばにいる私も同じように暗闇にじわじわと引きずり込まれていくような状態になっていました。ただただ、「イエス様、助けてください。私たち二人が共に喜べるようにしてください。他には何もいりませんから、イエス様のみ業を見て心から喜べるようにしてください。」と必死で祈る毎日でした。

今年一月になって直ぐ、私の祈りを主が聞いてくださったと確信できる奇跡のような出来事が次々に起こされました。主にある兄弟が、御代田の我が家の夫の寝ている寝室まで来てくださり祈ってくださいました。そうしたら夫の顔が嬉しそうな笑顔になり、いままで主人をおおっていた暗闇がスーと消えていくように顔が明るくなり、次の日には午前、午後、夜の集会に、痛み止めの薬を飲みながらではありましたが、全集会に自分から進んで参加し兄弟姉妹と嬉しそうに交わり、私たち家族は本当に驚くとともに、兄弟姉妹の祈りがどんなに力になるかということをしっかりと見せていただき、心から感謝することができました。

召される直前まで、主にある兄弟姉妹の祈りと交わりに支えられ、私たち家族は、夫がこの世からいなくなる淋しさや悲しみに打ちひしがれることなく、イエス様を中心とした兄弟姉妹の沢山いる大家族の中にいるのだという安心感に包まれていました。いまは時折なんとも表現できない頼りなさというか心もとなさを感じたりはしますが、そのつどイエス様を中心とした家族の中にいるのだと気づかされ、平安に守られています。

夫の生涯は決して輝かしいものではありませんでした。本人はこの世の栄光の階段を上り詰めていきたかったようですが、仕事の面では思うようにならないことも多く、しかも何度も大病をし、途中で栄光の階段を上ることを諦め、降りていかざるをえない人生でした。でも降りていくときにいつもイエス様が夫と一緒にいてくださり、時には夫の手を引き、支えてくださり、時には背負い、そして最後はすっぽりと主のみ腕に抱き、包み込んでくださった感じがします。イエス様はいつも「あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」と言ってくださっていて、生きる価値があると言い続けてくださっていましたので、どんな状態の時も絶望せずにいられました。そして人生の階段を降りきったところで、天国が見えたようです。召される間際、子どもたちに「一番大切にすべきはイエス様だ。」とはっきり言いました。

「主に信頼するものは、失望させられることはない。」という聖書のみことばは真実でした。これからも、「天国に来てもいいよ。」とお許しが出るまで、イエス様に信頼し続けていきたいです。そして「私も来たよ。」と天の御国で夫と再会したいです。晴れやかにそして喜びに満たされている主人と再び会うのが待ち遠しいです。

主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。（詩篇 33・6）

見よ。主の目は主を恐れる者に注がれる。その恵みを待ち望む者に。彼らのたましいを死から救い出し、ききんのときにも彼らを生きながらえさせるために。私たちのたましいは主を待ち望む。主は、われらの助け、われらの盾。まことに私たちの心は主を喜ぶ。私たちは、聖なる御名に信頼している。（詩篇 33・18〜21）

岩下　肇

一九四五年　新潟県生まれ。立教高校、日本大学卒業。東京工業大学、多摩美術大学勤務後、マナデザイン一級建築士事務所設立。

岩下　裕子

一九五〇年　徳島県生まれ。恵泉女子学園高校、恵泉女子学園短期大学卒業。

あなたは高価で尊い。
わたしはあなたを愛している



前列左端、肇さん、後列右から2人目、裕子さん

天国での再会を楽しみに

佐藤汀



お父さん天国へ／心（こころ）くんの絵

二〇〇八年三月に、主人に直腸がんという病気が与えられました。どうすれば私達家族が本気で祈り、イエス様に頼り切ることが出来るのか、その答えが主人の病気でした。

がんという病気が与えられてから、主人がどんどんと変わってゆくのを感じました。イエス様の喜ばれることをしたい、イエス様を喜んでいたい、いつも主にある交わりの中にいたい、みんなと心を一つにして祈りたい、イエス様をもっと紹介したいと強く思っていることがよくわかりました。最後の二ヶ月弱の入院生活では、たくさんの兄姉が病室を訪れて下さり、みことばと賛美のお交わりで、イエス様のことを喜ぶ思いでいっぱいの病室でした。私も病室で主人と話したり、足や背中のマッサージをしたりしながら、メッセージや賛美のCDを聴き、幸せでした。毎日病院へ行き、イエス様と会っているような、あたたかい、素敵な時間を過ごすことができました。十一月二十日ごろ、痛みが強くなり、吐き気も重なって、つらい状況へとなっていきました。主人は、意識がなくなる直前まで、私の頭をなでて、涙を手でぬぐってくれていました。大きく手を広げ、ぎゅっと抱きしめてくれました。そして、意識がなくなり、二時間ほどで天国へ帰ってゆきました。十一月二十二日、いい夫婦の日の聖日のことでした。はっきりと上を見ながら、そして歯を出してにっこりと笑いながら、召されました。四十二歳でした。私の父と主人の母と姉も、ともに見送ることができました。主人は、携帯のメモ帳に遺言やたくさんの証しを残してくれました。私には、これからの生活のために一番必要な言葉を残してくれました。

「子どもたちの教育について迷った時や、経済的に困った時は必ずイエス様に相談して下さい。あなたができる事は本当にわずかです。みことばは真実ですから、家族の救いとご再臨の約束に希望をもっ

佐藤汀

て、子どもたちと仲良く日々を歩んでください。いずれ天国で再会できるという約束は、今の僕にとって大きな慰めです。」（抜粋）

主人の前夜式・召天式には、一番いい日が備えられました。会社の方や、子どもたちの学校や幼稚園のお友だちとお母様方、先生方もたくさん来て下さいました。また、日本全国からハレルヤコーラスを歌いにたくさんの兄姉が来て下さいました。主人がみことばに触れて欲しいと思っていた方々、みんなが来て下さいました。主人の願いどおりの素晴らしい前夜式・召天式になりました。たくさんのみことばの種が蒔かれました。主人が召されてから、八ヵ月が経ちました。子どもたちとは、毎日天国の話をしています。この世的に見ると、つらく悲しい三人の生活ですが、実際は全く違います。不思議な大きな物で包まれている安心感があります。天国で会える日がどんどん近づいていると思うと嬉しくなります。全国の兄姉のお祈りに支えられて、私達は毎日を平安のうちに過ごしています。時間が経ったことで、心にぽっかりと穴が開いたような気持ちになり、寂しさでよく涙が出るようにはなりました。耳から入ってくる音楽や、目に飛び込んでくる風景に、お父さんを思い出しては泣いています。でも、不思議なことに悲しみという感情ではありません。それは、天国で絶対に会えるという約束があるからです。もう少し待っていたら、イエス様が迎えに来てくださって、主人に会えるからです。今度こそ家族四人でずっと一緒にいられるようになるからです。一日でも早く迎えに来て欲しいと心から願っています。正直なところ、子どもたちのことを一人で見なければならないのは、とても大変です。でも、主人が遺言で残してくれた通り、私にできることはほんのわずかなのです。すべてイエス様が私達家族を背負って下さり、天国で主人と一緒に祈っていて下さるので私達は大変でも大丈夫なのです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。
（詩篇119・71）

これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。
（マタイ21・42）

主人の死によって蒔かれたみことばの種が、多くの実を結びますように。そして、早く天国で一緒に過ごせますように。

佐藤　汀（さとう・みぎわ）
一九七四年、大阪府生まれ。私立百合学院小、同中、同高校卒。私立神戸海星女子学院大学文学部英文学科中退。長男・心（こころ）、長女・賛（たたえ）。

佐藤　精（さとう・すぐる）
一九六七年、岡山県生まれ。市立落合小、市立高梁中、高梁高等学校卒。私立神戸学院大学経済学部中退。株式会社日米クック入社（召されるまで）。
二〇〇八年三月に直腸がんが発見され、入院手術。その後一年八ヶ月間闘病生活を送り、二〇〇九年十一月二十二日に召される。

天国での再会を楽しみに


精さん、汀さん、賛ちゃん、心くん


精さんと汀さん

佐藤汀

私は、いつまでも主の家に住まいましょう

仲里喬子

大城紀美子姉妹（94歳）の葬儀での
仲里喬子姉妹のご挨拶



紀美子さん、喬子さん、明美さん

ただいまご紹介にあずかりました長女の仲里喬子でございます。きょうは、母、大城紀美子の葬儀にご参列くださいまして、みなさまありがとうございます。母はふつうの専業主婦として生き、夫を愛し、家族を愛し、周りの人々に気を配る、誠実な信仰深い人でした。そんな母の思い出を語るにはあまりにもたくさんのことがございまして、一言では語り尽くせません。それで、母が残してくれたある一通の手紙を読ませていただきたいと思います。

『愛する　喬子へ

詩篇23篇
主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

主の御名を賛美します。私は今、元気です。けれどもいつ召されるかわからないので、みなさんに最後のことばを残して置きたいと思います。私の今の気持ちは、詩篇23篇の「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。」のみことば通りです。また「私の杯はあふれています。」のみことばは何と嬉しいことでしょう。私も、そのように言えるよう導いて下さったのはイエス様です。ありが

たいことです。主イエス様がいつも共にいてくださる、その人生は何とすばらしいことでしょうか。私はその喜びと平安と希望で満たされています。ですから、今、何の心配もありません。思い煩いがありません。天国に行くことを喜んでいます。

みなさんとの想い出はたくさんあります。楽しいことがいっぱいありました。私のためにいろいろなことをしてくださいましたね。よく尽くしてくださいましたね。本当にありがとうございました。

一人一人の幸せを心から願っています。主に祈っています。主イエス様の豊かな祝福がありますように。私は、いつまでも主の家に住まいましょう。

主イエス様に心から感謝しています。

大城紀美子』

この手紙は一九九八年九月十五日に書かれたものです。その頃から、母はいつ天国に召されても私たちが平安に受けとめることができるようにと、準備をしてくれていたのだと思います。

母は、この手紙を書いてから十一年後の二〇〇九年十二月二〇日に、楽しみにしていた沖縄キリスト集会のクリスマス会に出かける途中で胸の痛みを訴え、お世話になっていたケア・ハウス「有明の里」に急遽もどりました。診察の結果、狭心症と診断されました。そして、二日後の十二月二十二日に召されました。その場に立ち会うことができた妹たちと私の心は、不思議な平安と喜びに満たされていました。母の召天と同時に全員で感謝の祈りを捧げることができました。

死因として「心不全」という病名が書かれましたけれども、主治医の金城先生は「これは病ではなく、与えられた命をまっとうしたのですよ」とおっしゃられました。まさしく、母の生涯は先ほどお読みした詩篇23篇のようなイエス様に導かれた生涯だったと思います。

本日は皆様、暮れのお忙しい中をご参列くださいまして、本当にありがとうございました。

仲里喬子（ナカザト　タカコ）

一九四一年沖縄県那覇市出身。開南小学校、上山中学校、県立那覇高校、東洋女子短期大学卒。

琉球火災海上保険、日本航空沖縄支店、勤務。

夫・郁夫、長女・伊良部いずみ、長男・幸一郎、次男・伸二郎、孫5名。

母・大城紀美子

一九二五年沖縄県国頭村奥に生まれる。大城鉄一さんと結婚、長男・鉄也、長女・仲里喬子、次女・高橋久美子、三女・杉山るみ子、四女・宇久田恵美子、五女・松本明美を授かる。夫の鉄一さんは一九六七年に五十六歳で昇天。孫十一名、ひ孫七名。

喬子さん、るみ子さん、恵美子さん、久美子さん、明美さん、中央、紀美子さん



私は、いつまでも
主の家に住まいましょう





医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です

田中順治

二〇一〇年は私にとって忘れられない年になりました。大腸ガンと宣告され、S状結腸の切除手術を受けることになったからです。これまでの六十有余年の人生で、手術はおろか一日たりとも入院経験のなかった私には、まさに青天の霹靂でした。そんな私でしたが、主の一方的な恵みにより、終始一貫、思い煩いから解放され不思議な平安のなかで入院生活を送ることができました。主治医のイエス様はもちろん、病院でお世話になった消化器外科の先生方やスタッフの方々、そしてこれまでお祈りに覚えてくださった多くの兄弟姉妹のお一人おひとりに、心から感謝いたします。以下、主の恵みの数々のごく一部をお話しさせていただきます。

最寄りの病院で例年どおりの定期健診を受診したのは一月末のことでした。翌二月に「便に潜血反応あり」との検査結果が通知され、三月十日に大腸の内視鏡検査を受けたところ、ポリープと腫瘍が発見され、患部の組織を切り取って病理検査に回した結果、三月下旬には正式に大腸ガン（S状結腸の腺ガン）との診断が下されました。自覚症状は一切ないにもかかわらず、あれよあれよという間に、私はガン患者になっていきました。どこかお腹でも痛ければ別なのでしょうが、どこといって痛くもかゆくもないので、医師から説明を聞くときも、私自身はなんだか他人ごとのような感じがいつもつきまとっていました。

三月二十三日に、入院予定の病院に行って、担当の先生と初めてお会いしました。腹腔鏡下手術という術式で、患者の負担が小さく、通常は術後十日程度で退院できるとのことでした。先生のお話では、腺ガンというのは、たちの悪いガンらしく、一日も早く手術を執刀したがっておられるようなご様子でした。

ところが私たち夫婦は、その二日後の三月二十五日、成田発のバンクーバー喜びの集いに参加する予定だったのです。私たちはどうしても喜びの集いに

参加したかったものですから、クリスチャンの集まりでお酒は一滴も飲みませんからバンクーバーに行ってもいいでしょうかと、先生にお尋ねしました。先生は、表情を硬くされて、「行ってもよいとはいえませんが、まあ、どうしてもいらっしゃるんならそれは患者さんの自己責任でお願いします」とのご返事でした。そのようにして出かけたバンクーバーの喜びの集いは、まさに主の祝福と恵みがあふれるキャンプでした。

三月三十日に帰国。バンクーバーの喜びがまだ消えやらぬ四月二日に慌ただしく入院しました。手術をしてくださる先生から家族に対してインフォームド・コンセントの詳しい説明がありましたが、その締めくくりに「全力をつくして手術をしますが、最後は神様に祈るだけです」とおっしゃったことばが、心に深く残りました。

手術日は四月七日に決まりました。その四月七日の「日々の光」のみことばは、圧巻でした。「朝」のみことば：私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。（2コリント　7・4）「夜」のみことば：主は病の床で彼をささえられる。病むときにどうか彼を全くいやしてくださるように。（詩篇　41・3）彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、・・彼らを背負い、抱いて来られた。（イザヤ　63・9）主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。（ヨハネ　11・3）

まさに「主の山の上には備えがある。」（創世記　22・14）のお約束のとおり、手術の前後には完璧なみことばの備えがありました。

術後の回復も順調で、手術から一週間の四月十四日に退院が許されました。今回のガン宣告から入院・手術・退院という一連の流れのなかで、物・心・霊のすべての面で私を支えてくれた家族、妻の節子、子どもたちの桃子、遊、岳に心から感謝しています。

なお、長男の遊は私が入院した病院の薬剤部で働いているのですが、後で聞いてびっくりしたことには、私の手術の日はたまたま手術室の当番になっていて、私のための麻酔薬を出してくれたとのことでした。

今回の私の病気を心に覚えてお祈りしてくださった兄弟姉妹、励ましのみことばをお送りいただいた兄弟姉妹、病室までおいでくださってお交わりをしてくださった兄弟姉妹、みなさまお一人おひとりに、そしてなによりも主イエス様のご愛とみ恵みに、改めて心から感謝いたします。最後に、先ほどの「日々の光」の手術当日の「夜」のみことばで終わります。

「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（2コリント　12・9）

田中順治（たなか・じゅんじ）
一九四六年東京都生まれ。東京教育大学付属駒場中・高等学校、東京大学経済学部卒、富士銀行に就職し、現在、パテントヒンメル勤務。妻・節子、長女・桃子、長男・遊、次男・岳

医者を必要とするのは
丈夫な者ではなく、病人です



順治さんと節子さん

辻純姉妹から
ベックさんへの手紙

辻純



百合香ちゃん、光一くん、真理恵ちゃん、純さん、愛結実ちゃん、陽一郎さん

主の御名を心より賛美申し上げます。

なかなかお目にかかれませんが、いつもメッセージを心より感謝して聞かせていただいております。主人、陽一郎が召されて一ヶ月半が過ぎました。今、毎日が本当に平安です。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。(詩篇119・71)

あなたの先祖たちの知らなかったマナを、荒野であなたに食べさせられた。それは、あなたを苦しめ、あなたを試み、ついには、あなたをしあわせにするためであった。・・・・ (申命記 8・16)

あなたは「わたしの喜びは、彼女にある。」と呼ばれ、あなたの国は夫のある国と呼ばれよう。主の喜びがあなたにあり、あなたの国が夫を得るからである。 (イザヤ 62・4)

本当に、このみことばの通りです。私は夫を失ったのではなく夫を得たのだと主は語ってくださいます。主人のために与えられていたみことばは、すべて実現しました。毎日みことばを読むたびに、主のすばらしさを感じ、感謝です。そして今、主人はイエス様のそばですべての苦しみ、悩みから解放されて喜びに満たされていることを思うと、本当に感謝であり、また安心です。私の苦しんだ苦しみは平安をいただくためだったのだと、実感しています。主人もきっと同じことを思っていることでしょう。

病室で主人と共に祈り共に聖書を読んだときに、私たちは本当に一つになりました。「本当の夫婦になった」と思える、しあわせな、しあわせな時でした。みことばは、死が近づくほど、ますます希望で

あふれてきました。私たちの罪がイエス様の十字架で赦されたという、この恵みの大きさ、永遠のいのちを与えていただけるゆるぎないお約束、永遠の愛で愛されていること、主人に約束された将来と希望をはっきりと見せていただけました。これまでイエス様を信じてきて本当によかったと思います。と言うより、もし、イエス様がおられなかったら、私たちは滅んでいました。

今まで、つらすぎて自分には信仰もないのではと思えたとき、いつもメッセージをいただき、必死で繰り返し聞き続けました。そしていつも主から悔い改めをいただきながら、信仰のない愚かな者が、主の群れの中に置いていただいて来ました。

主のみことばがなければ、そして、兄弟姉妹方の主にあるご愛とお祈りがなければ、今の私はありません。本当にありがとうございました。そして、これからも、この弱い私たち家族をお祈りでお支えください。

主人の葬儀を通して、多くの方々がメッセージを聞いてくださり、心を開いてくださったことも感謝です。その方々の救いをこれからも祈り続けます。主人の信仰がこれからも用いられますように、助け手として祈り続けるつもりです。子どもたちも、パパが天国で生きていることを感じて安心しています。

これから、子どもたち一人一人が本当の悔い改めをもった信仰へと導かれますよう、引き続きお祈りをよろしくお願いいたします。私も残された人生は御国を目指して、いつもイエス様のみことばに耳を傾けて、イエス様との交わりのうちに祈りの日々を送れれば、と願っています。5月の御代田「喜びの集い」には、私もようやく行けることになりました。とても楽しみです。

キリスト集会全体のためにも、主の勝利を感謝しつつ、日々お祈りしています。ではまた、キャンプでお目にかかれますのを楽しみにしております。

主にあって。

二〇一〇年四月二十六日　辻　純

辻陽一郎

一九六四年神奈川県生まれ。練馬区立八坂小、学芸大附属竹早中、学芸大附属高校、東京医科歯科大学卒業、同大学付属病院、武蔵野日赤病院、都立墨東病院、防衛医科大学付属病院小児科勤務。小児科医師。

一九九三年、結婚。長女真理恵、次女百合香、長男光一、三女愛結実。二〇一〇年三月十一日昇天。

辻純

一九六七年千葉県生まれ。杉並区立浜田山小、東田中、東京芸術大学附属高校、同大学器楽科バイオリン専攻卒業

辻純姉妹からベックさんへの手紙





後列右から、光一くん、純さん、中央、陽一郎さん、愛結実ちゃん



私はいったい何者なのでしょう

白石光一

私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。

（出エジプト　3・11）

自分がなぜ神様から愛されているのかを考えてみると自分の生い立ちから見直してみようと思いました。一九五九年五月十九日北海道釧路市で父三男、母房枝の子どもとして生まれましたが、家はいわゆる仏教の家でした。この事実は、計り知れない神様の愛の中にあったことは今になってより知ることになりました。この両親の間に生まれたことは自分の意思ではなく、名前も自分の意思ではなくほかのすべてのことも生まれる前から神様のご意思であったことを感謝いたします。「あなたの父と母を敬え。」と聖書にあるのは、両親には人間的愛を超えた神様の愛があるからであり感謝しています。生まれる前から自分の存在を認めてくださったことを知ることができました。神さまは、私を父と母と姉の救いを祈り、みことばを伝える存在としてくださいました。

それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。

（詩篇　139　13、14）

神は仰せられた。「わたしは、あなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。

（出エジプト　3・12）

白石光一

聖書のことをほとんど知らず一般的日本人として普通の風習の中で育ち、高校生まで釧路にいましたが神奈川県の東海大学医学部に入学が許され上京することになりました。このことで自分が信仰を持つことになる大きな二つのことが起きました。

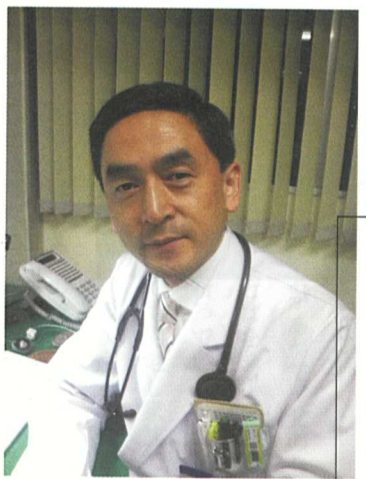
父は、東京でもっとも固い（誘惑が少なく勉学に励むことができる）宿舎を探していました。紹介されたのは、登戸学寮という私が生まれたころにできた無教会派のキリスト教の男子学生寮でした。寮内は禁酒、禁煙で毎朝祈りと賛美があり、日曜日は聖書講義もありました。ここへ入寮できたのも登戸学寮の当時寮長であった大島智夫先生（前横浜市立大学医学部教授）が東海大学教授の中山先生に寮生募集を依頼され、父の知人でもある東海大学医学部長であった佐々木正五先生へ話をしてくださっていたためクリスチャンではない二人の方を介して不思議な導きで入寮できました。ここで初めてイエス様が私たちの罪のために十字架について犠牲になられたこと、パウロが神さまの真実を世界へ伝えたことを知りましたが自分が信仰を持ったのかどうか分らない状態でした。

大学一年の二月に以前から誘われていましたが断っていた医学部のサークルで聖書を読む会に参加するように導かれ、当時衛生学教授でサークルの部長教員だった重田定義先生の部屋を夕方に訪れたことを覚えています。週一回聖書の輪読と学びを行いました。毎年入部者があり求める人たちは絶えませんでした。いのちの意味について医者を志すものとして重田先生とご家族の信仰生活の激動のときであったと思いますが、その信仰を通して私は守られたのだと感謝しています。いつの間にかイエス様が一緒にいてくださると思えるようになっていたことが自分では理解できないことでしたがそれが神様のしるしであったと信じることができます。

人の人生は犠牲の上に支えられています。両親、妻、恩師、上司、同僚、友人そして信仰をともにする兄弟姉妹の犠牲があり、それらすべて十字架についてくださったイエスさまの犠牲の上に成り立っていることが分るようになって来ました。自分が何者なのか。登戸学寮と聖書を読む会を通して、神様がいつも一緒にいてくださり、神様が遣わされたものであり、導くための犠牲となるものであり、仕えるものでることを示されました。

大学を卒業するときに重田先生から送られたみことばが医師として働く支えとなっています。

イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父が私を遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」（ヨハネの福音書 20・21、22）



私はいったい何者なのでしょう

白石光一
一九五九年北海道生まれ 釧路湖陵高校、東海大学医学部卒。東海大学医学部消化器内科准教授（肝臓疾患専門） 家族 妻／万里子、長女／里菜

神は、すべての苦難から私を救い出してくださった

佐藤野ゆり



野ゆりさん、弘康さん、恵糸ちゃん、真木くん

私の生い立ちをお話しいたします。

私は、兄弟五人の四番目、三女として生まれました。ものごころがついてからはもちろん、それ以前から我が家はイエス様中心の毎日でした。平日のお昼には家で婦人会が開かれていて、学校から帰ると、たくさんの姉妹方が集まって聖書を学び、お祈りをしていました。悩みを抱えた方がおられたりすると、気がついたらもう夕食の時間になっていて、みなさん急いで帰られたり、母も慌てて晩御飯の用意をはじめることもしばしばでした。

しかし、こんな日常を嫌だと思ったことは一度もありません。婦人会のあいだは宿題をしなくてもよいということもあったのですが、それだけではありません。子どもの私にはよくわからなかったにしても、悩んでおられる方が涙しながら喜んでいたり、みなさんでともに賛美したりする光景を陰から眺めていると、心から「よかったなー、イエス様を信じられてよかったなー」と私も涙が出そうになったり、心がワクワク嬉しくなっていたことを思い出します。

「イエス様を信じると、周りはこんなに嬉しいものなんだ！」と小さいときから心に感じていました。このように、幼いころからあたりまえのようにイエス様を信じていましたし、学校のなかでも、行き帰りなどになにかあれば、「イエス様、助けてください」と祈っていたように思います。

週の半ばの夜には祈祷会があって、父の会社の方々など男の人を中心にみことばをテープで聞き、その後、遅くまでみなさんで祈っていました。祈祷会の日には、父が会社から慌てて帰宅し家族で急いで夕食をすませると、その後、我が家か他の兄弟姉妹のお宅で祈祷会がはじまるのでした。両親が祈祷会に出かけてしまった夜は、とても心細かったのを覚えていますが、姉や兄がいましたので、ケンカしたり遊んだりしながら過ごしました。

月に一回、土曜日には、土曜学校といって、学校のお友だちや近所の子どもたちが我が家におおぜい集まって、イエス様のお話を聞き、讃美歌を歌い、お菓子をもらって解散という、日曜学校のようなものがずっと行なわれてきました。何年もたってから、その土曜学校に集っていた方が近江八幡の集会に導かれてきたことを聞くと、本当に、福音の種はいつどこで芽を出すかわからないと、嬉しくなります。

みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても
しっかりやりなさい。　（2テモテ　4・2）

そのほかの土曜日は、我が家での、たくさんの人が集まってこれらる日曜礼拝に備えて、家族で大掃除、そして日曜日の愛餐会のための食材の買い出しと・・・本当にすべてが集会を中心に回っていた我が家でした。どんなときも主を第一にしていた両親のもとで育ったことは本当に恵みでした。

九歳離れた弟が誕生するまでは、自分が末っ子でしたので、私はわがままで・・・そして、とにかくクルクル動き回る元気な子どもだったようです。元気で、とくに悩みもないそんな私でしたが、小学六年の修学旅行の特急列車のなかで、突然、いままで体験したことのないものすごい恐怖におそわれました。それまでペチャクチャとお友だちとお話をしていたのに、急に、「電車が止まらない！」という恐怖心でいっぱいになりました。頭のなかが真っ白になり、体が宙に浮くような感覚になり・・・周りの友人たちの様子もわからず、声も聞こえないという状態になりました。「こんなことだれにも言えやしない。恥ずかしい。」きっと神様の名前を呼んだと思いますが、覚えていません。

周囲の人たちに聞かれないように、担任の先生に「恐いんです・・・」と泣きながら話したのは覚えています。先生も「なに言ってるんやー」とわけがわからない様子でした。その後の車中はどのように過したのか覚えていませんが、いまから思えば神様に守られて下車したのだと思います。これが、いまなお私がもつ不安の性質の始まりでした。

そして、この弱さといってよいのかどうか、表現がよくわかりませんが、この性質によって、私はいままで主から離れることはありませんでした。しかし、その歩みは、弱ささえも・・・すべてを変えて益としてくださる主に完全にお委ねして明け渡す歩みではなく、この目に見える世界と欲望に足を置いた歩みだったのです。あの修学旅行の日を境に、いつも元気な明るい自分と、いつもなにか不安を抱いて心が落ち着かない自分と、この二つの自分が私のなかに共存するようになりました。

その後も、あのなんともいえない緊張感と恐怖が突然よみがえってくるのです。泣いて、このつらさを父母に訴えたこともありました。しかし、きまってそのたびに「お祈りしましょう。あとはだいじょうぶ！」との答だけでした。その当時は、それが腹立たしく思われたのですが、いまでは、両親は五人の子どもたちのすべてを常に主に委ねていたのだとわかります。

中学生になると、ますます不安症が大きくなり、電車のなかだけでなく、ふつうに生活していても、なんだか体が宙に浮いているような感覚に陥ることがありました。理解に苦しむような、そして滑稽な話に聞こえるかもしれませんが、ある日、昼寝から目を覚ましたまさしくその瞬間、自分はいま地球のうえにいるのだと思い、その当然の事実がとてつもない恐怖となって、私はまたパニックに陥ってしまったのです。いてもたってもおれなくなって、両親に泣きながら「怖い、怖い」と訴えました。

日常のふとした瞬間に恐怖に支配されることが多

くなり、授業中でも手に汗が噴きだして動悸が激しくなり、授業どころではなくなるときもありました。常に不安と心配が心を支配して、心ここにあらずの日々を送っていました。しかし、それをあえて振り払うかのように冗談を言ったりして、友だちのなかでは私は「明るいノジ（私のあだ名です）」で通っていました。事実、私はそうした明るい性質ももちあわせていました。どちらも本当の自分でした。

高校は、一貫教育の同じ学校へ進むつもりでいたのですが、それまでピアノだけは唯一続けており、またそれなりに頑張ってやっておりましたので、愛知県の音楽科のある学校を受けてみたらどうかと、中学卒業まぎわに両親から勧められました。同じ近江八幡市に住んでいた、同学年のいとこの静恵ちゃんも一緒に受験することになり、ふたりとも合格しました。急遽、自宅を離れ、豊橋市に行くことになりましたが、いとこと同じ学校へ進めたことはたいへん心強いことでした。

豊橋へ行くすこし前に、父から、ちょうど洗礼式があるから受けないか、と言われました。私は、すぐに受けたいと思いました。そのとき、これまでずっと悩んできたこの、日々なにがなんだかわからないふわふわとした自分、この不安でいっぱいの病気を、その洗礼を通して神様が治してくださるのだ！と、本気でそう思ったからです。でも、イエス様が自分のために十字架にかかって死んでくださったという思いや考えには、そのときはまだ至りませんでした。

幼いときから、イエス様は私たちの罪のために十字架にかかって死んでくださり、よみがえってくださったと信じてはいたのですが、それは聖書のなかの大きなできごととして頭に入っていただけでした。十字架と私自身を重ね合わせて、そのなかで悔い改めるというまことの信仰には、まだ至っていなかったのです。十字架の意味は頭で理解できることでもありませんし、わかるものでもありませんが、日々のさまざまなできごとを通して、十字架を体験するようになったのは、結婚してからのことでした。私のうちにある主イエス様、御霊様を通して十字架を思わされ・・・そこで、悔い改めと感謝を日々繰り返すものとなりました。このことを私ではなく、イエス様がしてくださいました。

しかし、洗礼を受けたその当時の私の信仰は、ただ、神様を信じる、それだけでした。そして、洗礼によって奇跡が起こされて、不安な性質が消えてなくなることを真剣に願いました。そして、その日を迎えました。洗礼は滴礼で行なわれました。洗礼を受けるまでは、自分の番が回ってきて頭に手を置かれたとたんに、スーッと不安が消えてなくなることを心底願い、そうなるのではと希望をもっていたのですが、洗礼を受けてもなにも変わらなかったことは、私にとってはたいへんなショックでした。

洗礼とは、自分に死に、私たちのうちに宿る御霊様によって新しくされ、この世にあっても主と一つになる喜びの「証し」となるはずのものですが、まちがった期待のために、逆にものすごい孤独感に襲われました。もちろん、神様を信じ、決して疑いはしませんでしたが、神様ははるか遠いところにいる方なのだと思いました。

そして、そのまま高校に入学、寮に入りました。初めて家族から離れたことから不安症は以前よりも増し、毎晩九時の点呼と消灯の時間がくるたびに同じ不安と恐怖が襲ってきました。布団のなかで聖書を開いて、「助けてください！怖いです！」とみことばを探すのですが、平安にはなりませんでした。そんななかで、次のみことばだけを頼りに、ほぼ毎晩を過ごしました。このみことばは、確かに慰めにもなっていました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

夜中にハッと目を覚ましては、じっとしていることができず、廊下を走って五階のトイレの窓から外を眺め、心のなかで「助けて・・・」と叫び、自分はこのまま死んでしまうのではないかと思うときがなんどもありました。私は気が狂っているのだと思いました。朝になるといくぶん緊張はやわらぎましたので、不安を行き来しながらも、同じ敷地内にあった学校へ通うことができました。こんな日々の繰り返しでした。しかし、こんななかでも、やはり友人たちのなかでは明るい私でした。

そんな日々ではありましたが、ピアノは恩師長谷川淳先生に恵まれ、その先生のもとで、それまでのなかで最も一生懸命に練習したはずの三年間を、練習に明け暮れました。ひとり一部屋にピアノを持ち込んでおりましたので、練習可能な朝五時半から、一番に音を鳴らすのが恥ずかしくて、だれかが鳴らすまで待ち・・・そして練習を始めることもしばしばでした。毎年の定期演奏会のオーディションなどはなんとか通りはするものの、本番になると必ず不安症が顔を出し、弾いている最中に音符がわからなくなると、不安が怒涛のように支配し、演奏中、止まってしまったり・・・そのつど先生をがっかりさせていたように思います。そして、「もっと集中しなくてはだめだ！」と怒られ、だれにもわかってもらえない自分の精神状態に心底落ち込む三年間でもありました。

大学は、志望する大学に行けるだろうという思いで受験したのですが、不合格となりました。これもたいへんなショックでした。浪人を考えましたが、先生から、「ぼくがとても信頼し、よく指導してくださる教授がいらっしゃる大学が東京にあるから受けてみたらどうか」と、勧めていただき、浪人をせずに再び受験をすることになりました。

このように主が導いてくださった大学生活でしたが、私は主を知りながら、主に背いた歩みを続けるものでした。そして、相変わらず不安症に悩む日々でした。東京ではすでに社会人になっていた姉たちのふたり暮らしに加わり、三人で生活しました。これまでの寮生活とはちがって、姉たちと一緒にいるということだけでいままでよりは安心な気持ちでした。そして、なにより寮にはなかった自由、またいままでとはちがう大都会、こういった環境のなかで次第にこの世にも目を向けていくようになりました。そして、それがなんとなく不安を忘れさせてくれるような錯覚に陥りました。まさに、聖書の「まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。」（創世記　3・6）というみことばの通りでした。

しかし、当然のことながら、根本的な悩みはなんら解決してはいませんでした。そんななかでしたが、大学二年生のとき、ある男子学生と出会い、初めてお付き合いをするようになりました。とても心のやさしい人で、私は初めて家族以外の人と話ができるようになり、さらに月日が経つと知らず知らずのうちに家族以上に話ができる彼に頼る日々となりました。初めて私は家族以外の人に自分の不安症のことを話すことができ、一緒に電車に乗ってくれる彼に頼る日々でした。彼と会っていると、とにかく安心でした。

そして、気がついたときには、神様に頼る気持ちは二の次、三の次となっていたのです。当然ながら、

お付き合いの先には結婚も考えていましたので、自分はクリスチャンとしか結婚できないことなども話していました。彼は、私が当時通っていた近所の教会にも一緒に黙々とついてきてくれました。また、私の両親にも紹介し、なんどか交わってもらいました。私の兄弟とも、とても親しくなり、お付き合いを続けていました。彼は、神様のことは否定しませんし、このまま結婚するのだろうと私は漠然と思っておりました。

しかし、私自身の信仰と歩みは、まったく的外れなものでした。とりあえず教会に行けばよいというだけで、そこには主への感謝と賛美、日々の悔い改めはありませんでした。自分の都合のよいように神様を信じているだけで、神様に頼るのではなく、彼に頼っていたのです。いつもの不安が襲ってきても、彼に連絡をとり、そしてこの世に目を向けていると、その一瞬は不安を忘れられたのです。本当に「証し」にならない、わがままで自己中心などうしようもない歩みをしておりました。彼とは大学四年生までお付き合いをしておりましたが、結婚するならば東京で就職してほしいという私の願いと、実家に戻らなければならないという彼の立場とは、平行線となり、……その後、交際は終わりました。

ここでも、神様はいままでの歩みを悔い改めて主ご自身のもとへ来るようにと忍耐をもって私に呼びかけておられましたのに、私はまったくその御声に耳を傾けませんでした。神様を信ずる者には御霊が宿っているとありますが、私の場合、御霊は死んでいるのと同然でした。この世に目を向け、さまよい・・・本当に遠回りをしておりました。

ですからその後も、彼がいなくなった不安と、そこからくる孤独感を、神様のもとに携え出るのではなく、その後お付き合いをするようになる方や友人知人など目に見える人間に頼る日々が続きました。

そして、なんとか不安を紛らわす日々でした。そんなどうしようもない惨めな歩みをしていた私ですが、両親からは常に「結婚はどのような方としてもよい。条件は一つ。イエス様を心から信ずる方と結婚しなさい」と言われておりましたので、お付き合いする方を両親に隠すことはしませんでした。しかし、私自身が主を第一にせず、主に繋がっていない状態でしたので、不安をしばらくは忘れることができても、たましいの本当の安らぎ、心の平安はありませんでした。主は、どんなに忍耐をもって、そんな私を見ておられたかと、いま思います。

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。

（詩篇 73・21、22）

ある聖日の朝、よくないとわかっていても肉のあらゆる欲を優先してしまう自分の罪の性質に初めて心底からの悔い改めの気持ちが与えられ、声に出して「ごめんなさい、助けてください」と繰り返し祈りました。その暗く重い心をかかえ、いてもたってもいられず、午後の礼拝に出席しました。礼拝の最初の賛美の一つひとつの言葉が心にストンと入り、同時にさっきまであんなに苦しかった心がパァーと明るく平安になりました。礼拝のなかで、主が悔い改めの祈りを聞いてくださったことを感謝し、喜ぶことができました。

主は、こんな罪深い者をも憐れんでくださいました。二〇〇二年に、主にある兄弟、弘康兄弟との結婚へ導いてくださいました。弘康兄弟も初めは主を知らない方でしたので、みこころでなければ閉ざしてくださいと私は祈り、そしてまた両親も祈ってくれました。弘康兄弟は、イエス様をもっともっと知りたいと聖書を読み、集会へ毎週集っていました。

そして実際、仕事上のできごとを通して、祈りとともにどんどん主を体験していきました。そして、主を知れば知るほど自分の罪に苦しみ・・・しかし、それによって十字架を覚え、ますます喜んでいることがよくわかりました。

私は、彼の信仰を見て、「主はすごい、すごい」と改めて主の恵みを体験していました。

このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。（マタイ　20・16）

このようにして、主にある兄弟との結婚へ導かれたのは、主の憐れみのほかありません。三年後、長女の恵糸が誕生しました。恵糸が生まれ、半年が経ったころの九月の初め、ピアノの教師としてレッスンをしている最中にいつもの不安に襲われました。ときどきはあることでしたので、なんとかいつものように気を紛らわせようとしましたが、紛れるどころか不安が増すばかりで、ほとんどパニックになりました。なんとかその日のレッスンを終え、夜泣きをする娘の横で、体が地上に浮いている思いと感覚に捕われ続け、それまでのようにコントロールができなくなり、本当にこのまま私は死んでしまう、生きるのが怖いと、そういった思いに捕えられ、部屋のなかをうろうろとしました。

でも、私が死んだら娘はどうなるのか・・・と、悩みは絶頂に達しました。

この日を境に、朝起きてから寝るまでのあいだ、四六時中、生きることが怖く、体もふわふわと落ち着かなくなりました。当時、レッスンのあいだ預けていた近所の保育ママさんの家までの道のりを、泣きながらベビーカーを押しました。

夫以外のだれにもこの状態は言えませんでしたが、姉の喜枝子とその夫の佐野兄姉とは毎週のように祈り会をもちました。人のなかに入ることがとても怖く、集会には通えませんでしたが、なんとか佐野家の祈り会だけは夫に付き添われながら娘と三人で行くことができました。毎週毎週、生きるのが怖いと泣いてはともに祈ってもらいました。そんななか、義理の兄の佐野兄は「病院に行くことも主にある一つの選択肢ではないか」と勧めてくれましたが、とてもそんな勇気はありませんでした。

秋には、毎日祈ってくれていた両親が東京まで車で迎えにきてくれて、レッスンの休みを利用して、休養を兼ねて家族でしばらく実家に帰りました。また、母が我が家でともに生活してくれたこともありました。ただ、いま思っても本当に不思議だったことは、生きるか死ぬかの怖さのなかにあっても、一度も休まずレッスンを続けられたことです。

また、逆に言えば、このピアノレッスンが備えられていたおかげで、にっちもさっちもいかない状況のなかを生きることができたと思います。そして、娘がちょうど一歳になるころには、少しずつ以前のような生活ができるようになりました。極度の不安が薄れていきました。ずっと解決されないままできた不安が一気に爆発した数ヶ月でした。なぜだかはわかりません。しかし、私には必要なことであったと思います。

それまでは不安に襲われると、まっさきに人に頼り、目の前のなにかに没頭して、しのいできた私でしたが、そのときはどうにもなりませんでした。夫は、そのたびに仕事もそこそこに切り上げ早く帰宅してくれて、みことばや祈りをもってともに励ましてくれましたが、私は異常な不安を少しも紛らわすことができませんでした。

神様に頼るしかありませんでした。いまでもすべてが治ったわけではありません。いまだに電車に乗るのは苦痛ですし、不安症も相変わらずです。

しかし、当時のあのどうにもならない状態からは、気がついたら抜け出していました。

神は、すべての苦難から私を救い出し、私の目が私の敵をながめるようになったからです。（詩篇　54・7）

なぜだかは、やはりわかりません。すべては主がご存じです。

でも、このことを通して、主は「いつもわたしを見上げていなさい。わたしに繋がっていなさい」と、おっしゃっているように思います。

そして、さらに気づかされたことがあります。それは、自分はこんな不安症をずっとかかえてきて本当に哀れな者だ、飛行機にも乗れないため、勧めていただいた留学もできなかった、これさえなければ、もっとちがう歩みをしていたかもしれない、といつもまわりをうらやんだり、自己卑下をしてきたこと自体が罪であったと気づかされたことです。

これまでの私は、「私は、私は」と自分がいつも中心でした。一番大切なものは自分だったのです。自分を握りしめ、どうしても自分を捨てられない罪に苦しんでいたのです。また、肉の弱さ、それはだれのせいでもなく、また神様はそのままの私でよいとおっしゃっているのに、自分の力でそれをなんとかしようと頑張っては神様に背く罪を犯し続ける者でした。そうやって得たものはなにもありませんでした。

不安に襲われ続けているのも、罪だといまでは思います。しかし、かといっていま、すべてを明け渡しましたからもう大丈夫です！と宣言できるかといえば、嘘になります。肉はこのままですから、いつまた、あの恐怖に戻るとも知れません。いつかまた起こるのではないか、と捕われることもあります。しかし、神様はすべてをご存じであられ、最善をなしてくださいます。「私にはできないけれど、神様にはできる」この事実だけに目を留めて、これからも希望をもち続けていきたいと思います。

自分がどうであれ、主は確かにいまも生きて私を愛して導いてくださっておられることは、まぎれもない事実だと確信できます。これからの人生も、そのイエス様をひとりでも多くの方々、とくに私の場合は、主に与えていただいた多くのピアノの生徒さんとそのご父兄の方々にイエス様を知っていただきたい、そして、小さな器ですがこんな私を用いていただきたいと、祈り願っています。

主よ。あなたは、あなたのなさったことで、私を喜ばせてくださいましたから、私は、あなたの御手のわざを、喜び歌います。主よ。あなたのみわざはなんと大きいことでしょう。（詩篇　92・4、5）



佐藤野ゆり（さとう・のゆり）旧姓高村
一九七三年、滋賀県生まれ。夫弘康。長女恵糸、長男真木。



上海喜びの集い（ミニキャンプ）のご報告

まことに主は渇いたたましいを満ち足らせ、
飢えたたましいを良いもので満たされた。（詩篇107・9）

二〇一〇年六月二十六日（土）から三泊四日、上海でミニキャンプが開かれました。ベック兄姉初め、上海に以前住んでいたり、友人や親族がいるなど上海の方々のために祈りを積んできた兄姉、二十数名が参加しました。

急速な経済発展を遂げる中国の中でも、特に激しく変化している上海地域には、多くの日本人駐在員や留学生が在住しており、且つ違った環境の中で心に虚しさを覚えたり、主を求める方々が備えられています。今回のミニキャンプの目的は、上海の新しい方々の救いと上海や蘇州の兄姉との交わりでしたので、出来るだけ少人数で行い、一緒に行けなかった兄姉には祈りによる支援をお願いしました。

上海でのキャンプは八年振りとなりますが、その間も上海の毎週日曜日の礼拝と福音集会は張・佐藤いずみ兄姉のご自宅でずっと守られ、その他に平峰尚子姉妹のご自宅では毎週月曜日にメッセージテープを聞く会が持たれ、上海にいる多くの方が新たに福音に触れておられるなど、「時は備えられていた」と感じました。会場の関係で、集会は午前・夕方に毎日開かれ、メッセージと日本からの兄姉の証しが持たれました。上海側からは各集会に二十数名の方が集われ、会場はほぼ満席の状態が続きました。食事や夜の交わりの時も証しの場として主は豊かに用いてくださいました。上海の新しい方々とベック兄との個人的な交わりの時も、ほとんど連続的に持たれ　多くの方々が主の素晴らしさに触れたり、主を救い主として受け入れる機会としてくださいました。最後の集会の後、三人の兄姉が受洗の恵みに預かることが出来、新しい歩みを決心され、参加した一人ひとりが励まされました。特に今回は集会と並行して子供集会も開かれ、日本から参加した若い兄弟が聖書から分かりやすいお話をしてくれました。小学生から高校生までの十数名が参加すると共に、最後の夜はベック兄とも交わりを持つことが出来ました。

ミニキャンプ後も、日曜日の礼拝と福音集会、月曜日のテープの会には新しい方々も加えられています。また、今回のミニキャンプで福音に触れた方々、受洗された兄姉の為の祈りの課題表も現地から送付されています。今後とも上海地域にお出かけになる兄姉があれば、上海の集会に参加して恵みを分かち合って頂けると幸いです。

また、「実を結ぶ命」の中国語版が中国で出版されるようにと祈られ、準備していますが、未だ様々な言論の統制下にある中国では実現していません。合わせてお祈り下さい。

今回の受け入れのために準備して下さった兄姉や現地の方々に心から感謝します。

（山田渉）





町田鶴川家庭集会が導かれて

兵藤勝義



出張から自宅に戻るや否や、住まい探しが始まりました。十年来住んでいた妻の実家から独立するためでした。

今から五年前の出来事で、私にとっては突然のことでした。長い間の妻の祈りに主は答えてくださり、数ヶ月後にはここ鶴川の地に住まいが与えられました。この地を、主が何故選ばれたのか、このときには知る由もありませんでした。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」

（ヤコブ　4・14〜15）



与えられたこの地に住み始めてから、分かったことは、多くの兄弟姉妹が近くに住んでおられること、そして、新たに住み始められる兄弟姉妹が増し加えられていったことです。

こうして、近くの兄弟姉妹とのお交わりをいただくこととなり、三年前から我が家でクリスマスの家庭集会が始まりました。また、姉妹方の祈り会も導かれるようになりました。

クリスマスの家庭集会が始まってから、気付かされたことは、我が家は壁の仕切りなどの障害物の少ない、集会向きの間取りであることです。このことは私たちの計画したことではありませんでした。

こうして、年一回のクリスマス会だけでなく、ベック兄を迎えての家庭集会の開催を祈りの課題とするようになりました。近くの兄弟姉妹の祈りに導かれ、六月から町田鶴川家庭集会が始まりました。

あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。（イザヤ書　25・1）

主が、なぜこの地に我が家を与えられたのか、それはご自身の栄光を現わす家庭集会を開かれるためでした。振り返ってみれば、私たちは五年前から主のみこころの中を歩まされていたのです。

今思わされていることは、実に長い間、近くに住む多くの方々の救いが、兄弟姉妹によって祈られていたことです。

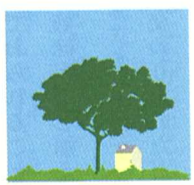
目がみたことのないもの、耳がきいたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。（1コリント　2・9、11）

我が家での家庭集会を通して、私たちは今、多くの恵みを頂いています。

近くに住む方々が救いの恵みに与るように、家族揃って祈っています。

この祈りを通して、今までの祈りの足りなさを改めて主から示され、祈りの恵みの大きさを感じています。

町田鶴川家庭集会
〒195-0056　町田市広袴3-43-12
Tel.042-737-3002
兵藤勝義 宅





私と私の家とは
主に仕える

小泉哲男

横須賀家庭集会



今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい。（ヨシュア記　24・14）

私と私の家とは、主に仕える。（ヨシュア記　24・15）

横須賀での家庭集会は二〇〇四年七月、近隣にお住まいの元オーケストラ団員でご病気で療養中の方（キリスト集会の姉妹のお父様）にイエス様の福音をお伝えしたいとの祈りを通して、賛美の集いとして起こされました。長年音楽に携わり、娘さんが集会のオーケストラに参加されていましたので、当初は御代田、あるいはメサイアコンサートへ何とかお連れできないかと祈っておりました。しかし外出することも厳しくなっておりましたので、横になったままでも集えるように我が家を主にある集いの場とさせていただきました。残念ながら当日の参加はかないませんでしたが、ご家族、兄弟姉妹の祈りを通して、後日ベック兄姉および多くの兄弟姉妹との交わりが与えられ、主を受け入れ、その後この方は主の御もとに召天されました。

私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。（ヘブル　13・15）

また二〇〇八年のリーマンショックの時に三十年余り勤務しておりました職場を離れざるをえない状況になりました。先のことはまったくわからず、世の流れの中に身をおくと不安が襲ってくるような時に、今まで行くことが出来なかった数々の家庭集会に集うことが出来ました。そこで語られる聖書の御言葉、兄弟姉妹とのお交わりは、すべてを益としてくださる主の計り知れない導きを確信し希望をいただき、改めて家庭集会の重要さを味わい知る時でもありました。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。（ローマ　8・32）

最近では二〇一〇年六月三日、横須賀にベック兄姉がいらしてくださいました。近隣のかたがたに加え、東京、埼玉、静岡の地から兄弟姉妹の親族、ご友人や悩みある多くの方を導いてくださいました。

横須賀市は神奈川県の三浦半島に位置しております。この地での主を求める群れにより多くの方々とお交わりの機会が与えられ、また新しい方へ聖書の福音が伝えられ、さらにイエス様を知る恵みをいただいた私たちが主の前に静まり、砕かれ、感謝と賛美の集いとなりますように祈る日々です。

キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ4・16）

横須賀家庭集会
〒238-0032　横須賀市平作3-2-23
Tel.046-852-1353
小泉哲男 宅



沖縄集会のいま

喜屋武　昌信

一九八五年、ベック兄との交わりと祈りの中で、大城紀美子姉のお宅で四～五名の姉妹達の小さな集会が始まりでした。しばらくして首里に一軒家が与えられ、礼拝が続けられましたが、大変狭く、集う方々が増えていく中で、私達はみんなで集う事ができる集会場を与えて下さいと、日々祈っておりました。いくつかの場所を転々とし、与えられたのが現在の集会所です。二十五年たった今、三十名余りの兄弟を含む約八十名の方々が礼拝に集うようになりました。毎週日曜日の礼拝だけでなく、火曜日の学び会、木曜日には祈り会と、日々祈りと賛美の中に包まれています。

しかし、多くの兄姉に祈りに覚えていただいている通り、沖縄集会には、大きな試練が与えられました。

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない　（詩篇　16・8）

苦しみの中にあった私達も、一人ひとりが心を合わせ主に訪ね求め、さらに祈るようになりました。そのような中で、神様の導きによって喜んでいる方々の証を通して、私達は恵みの上にさらに恵みを頂きました。今は、恵みの大きさにただただ感謝する毎日です。一つ一つの試練を恵みへと変えて下さる主は本当に素晴らしい方です。そのいくつかの証を紹介したいと思います。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。

（詩篇　119・71）

私の両親は、約四十年他の教会へ集い、姉と私もミッション系の学校を卒業しました。イエス様を信じつつも知識ばかりで、各々が自分勝手に歩んでおりました。そんな私達家族を主は長女の病を通して豊かに憐れんで下さり、深い悲しみの中、父が「光よあれ」の書物をきっかけに沖縄キリスト集会へと導かれました。次いで母の病が与えられ、母と共に私も集会へ集う様になり、今年四月主人も病の床でイエス様を心から信じる者とされました。

もしも、これらの苦しみがなかったなら、今もなお、私達家族は罪の中でもがき、悔い改めを知らなかった事でしょう。イエス様は各々の体験の中で、十字架の贖いをはっきりとお示し下さり、イエス様のいのちで満たして下さいました。感謝しつつ、この先何があろうとも私達はただ、イエス様だけを見上げて残りの旅路を歩んで行きたいと思います。

（新城　祥子）

二〇一〇年五月十一日、兄は四十年の闘病生活から開放され六十二歳で天に凱旋いたしました。　統合失調症・糖尿病・直腸癌を与えられ、それらの病に動揺する事もなく、あるがままを受け入れ、終りの住み家とした精神科病院で集会の兄弟姉妹との交わりが与えられ、天国の歌を喜び平安のうちに一年余りを過ごすことが許されました。

この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。　（ヨハネ　11・4）

それまでの兄は治療を拒否し、入院の説得に頑として応じず、家族の会話もほとんどありませんでした。家族としては、これ以上は放置できないと沖縄集会の兄弟姉妹にお祈りの協力を求めました。そしてついに、主は入院へと導いてくださり「入院する」と言ったのです。その声は主からの声でした。精神科の閉鎖病棟の入院に際して彼が用意したのは、着替えでもなくお金でもなく愛読していた一冊の聖書でした。家族が知る由もなく、イエス様は兄と豊かに交わっていたことを知らせされ、感謝の祈りを奉げざるをえませんでした。

（平良　久美子）

富山から移住し、沖縄集会に集うようになって二年が経過しましたが、公私に渡り兄弟姉妹に助けられ、イエス様に導かれる毎日を送る事ができ感謝しています。

本年四月十二日には富山で入院中の母が八十六歳で天に召されました。葬儀に際してはすべてを主にゆだね、沖縄集会、富山集会の兄弟姉妹にお任せし、生前母が身を粉にしてお客さんにサービスしていたドライブインの食堂で、聖書に基づいた手作りの心のこもった葬儀を執り行う事ができました。

生前母の見舞いに来られた仲井間ご兄姉から天国の話を聞き、母はイエス様を受け入れ、苦痛や不満を訴えることなく穏やかに過ごすことができるようになりました。葬儀はこれまでの習慣にとらわれず、食堂でキリスト集会のやり方でしたいと固く決意した翌日に、静かに召されました。

それまでの寒さが嘘のように、昇天式当日は晴れ渡り、桜は満開で天国への旅立ちを祝福しているかのようでした。遠路沖縄から多数参加され、地元富山の兄弟姉妹達には物心両面から支えていただき、イエス様のみわざに心から感謝しています。

（竹谷　徳雄　まり子）

これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。　（詩篇　118・23）

どのような試練の中にあっても、道であり、真理であり、いのちであられるイエス様に従って歩んで行きたいものです。